
教育総合センター

NO. 139

だより

平成 28. 3. 1



「素敵な笑顔を求めて」

教育相談・特別支援担当
課長 小寺 英樹

1 初心忘るべからず

小学生の卒業文集に書いた夢が叶い、昭和63年、教師になることができました。その時の喜びは、今でも覚えています。しかし、「本当の教師」になるためには、ここから大切であること、そして、責任の重さを痛感したのもこの時でした。

初任で配属されたのは、小学校ではなく肢体不自由養護学校(宝塚市)でした。戸惑いもあり、期待と不安の中、重度重複の子どもを目の前にし、「一体、自分に何ができるのだろうか」という自問自答の毎日でした。

まず、子どものことを理解すること、私自身を子どもに理解してもらうことから始めました。そして、何よりも子どものことを一番理解している保護者からしっかり話を聞き、信頼関係を築けるよう努力しました。授業の中で子どもが初めて笑顔を見せてくれた時、私自身も心の底から笑顔になったことを今でも忘れません。子どもの全てを認め、理解し、寄り添い、課題を分析して指導することの重要性を学びました。と同時に、この子の成長を支えるためにも専門的な知識と技術を身につけ、力量を高めなければと強く思いました。

2 つながりの大切さ

当時、学年は違いましたが、校内で熱心に研究を推進している先生に積極的に指導を仰ぎ、外部の様々な研修会に連れて行っていただき、専門性の向上に努めました。また、教育実践をまとめ、様々な研究会で発表などを行ってきました。そのことで、他校の専門性の高い先生方や大学教授などと知り合うことができ、今でもつながりを持つ

ことができています。このつながりは、まさに私にとっての財産であり成長につながっています。

昨年度まで小学校の教頭をしていましたので、教師が、非常に忙しい状況にあることは理解しています。しかし、校内の研究・研修だけではなく、先進的に実践を行っている学校や様々な研究会が実施している研修会などに参加し、研鑽を積むと共に、色々な人と知り合い人脈を広げることは、私の体験から、必ず貴重な財産になります。

一步踏み出されてみては、いかがですか。

3 子どもから学ぶ

脳性まひで知的な遅れはほとんどなく、車椅子で生活をしている高等部2年生の生徒を担当した時のことです。わずかに自力で動かせる右手でレバーを操作し、10文字を5分程かけて汗だくになりながらパソコン入力を行い、文章を作成していました。言葉で言うと簡単ですが、想像を絶するような労力だったに違いありません。この努力と前向きな姿に感動を覚えました。このことは、今でも私が苦しい壁にぶつかった時、自分自身を奮起させる一助となっています。

様々な環境が人を成長させ、教育がその重要な役割を担っていることは言うまでもありません。教育を取り巻く環境が大きく変化する中、苦労は数多くあると思います。しかし、『失敗を恐れず、様々なことにチャレンジし、素敵な笑顔があふれる子どもたち』を育てるためにも、われわれ教師が自己研鑽に努め、日々成長し続けたいものです。

未来に輝く子どもたちのために！！

☆☆☆教育総合センター研究発表会（2月15日）☆☆☆

教育総合センターでは、教職員の研修、教育の情報化の推進の事業を、連携して取り組んでいます。その中で、調査研究・教材開発事業において、研究員を委嘱し、センターの指導主事と協力して実践的な研究を進めています。また、地域の大学との連携による研究を一部取り入れています。その成果を研究紀要としてまとめ、教育総合センターのホームページに掲載しています。

その7部会の研究発表した内容を紹介させていただきますので、各学校で参考にしてください。

1 教育相談研究部会

（学校適応感を取り入れた指導のあり方）

未然防止、早期発見・早期対応を目指し、児童生徒理解に基づく生徒指導の充実を図るべく、本年度も勘や経験だけに頼らない客観的な尺度である学校環境適応感尺度「アセス」を利用した研究を進めています。今年度は、具体的に各学校現場での活用方法について研究を深め、学校や学級において児童生徒の実態が違う中でも、アセスを用いて客観的な見立てをし、児童生徒への支援につなげていくことが大切であると考え、実践した報告です。

2 教育の情報化研究部会 I

（学習支援ソフトの効果的な活用方法について）

生徒がコンピュータを用いて、5教科の知識の定着や技能の習熟を図ることができる学習支援ソフト（eライブラリ）を導入しています。それにより、市内の中学校教員がICTを活用した指導をしやすい環境が整っていると考えています。ここでは、eライブラリの多岐にわたる機能の効果的な活用場面の検証と、市内の生徒の学習活動や学習時間、学習意欲に対する効果を探った報告です。

3 教育の情報化研究部会 II

（校務の情報化推進についての研究）

校務支援システム導入から4年が経過し、各学校で運用されています。その中で、より活用実績のある学校の実例を合わせていくことで、児童生徒の指導に役立つ機能を利用した運用方法を見出せるのではないかと考え、実践した報告です。

4 外国語活動研究部会

（コミュニケーションの楽しさをあじわうこと

ができる授業のあり方を探る）

コミュニケーションの楽しさを味わうことができる外国語活動の学習とはどのようなものか、そのあり方について探るとともに、コミュニケーション力を培う外国語活動に焦点をあてて取り組み、小中の連携を考えた授業の形態について調査研究した報告です。

5 活用力向上部会 I

（活用力を育む授業構想に関する研究）

国語科の学習指導において、写真や絵などの非連続型テキストを介在させることによって、学習者の内言を豊かにし、外言として表出することで表現活動につながるように進め、そして、前年度に引き続き、評価指標を用い、教師の指導計画や指導内容を明確にすることで、学習者に対する手立てを講じることで、表現が豊かになっていることが明らかになった報告です。

6 算数教育研究部会

（「主体的・協働的な学習」の充実を踏まえた授業創りを探る）

算数科における「授業改善」を図り、「主体的・協働的な学習」を構築していく上で、次のような実践に取り組んでみました。

- 目標とする「授業像」「子ども像」を明確にする
 - 教師自身が「主体的・協働的な学び」の場면을数多く体験する
 - 「研究授業」、「授業診断」の場を年間2回以上設定する
- その効果を検証した報告です。

7 授業のユニバーサルデザイン化研究部会

大学との連携

（すべての子どもが「楽しく・わかる・できる」を目指して工夫する授業のデザイン）

特別支援教育の視点を導入した授業実践を通して、「どのような手立てをすれば、すべての児童生徒にとって『わかる』授業になるのか」「どうすればすべての児童生徒が『できる』授業になるのか」などの指導の工夫と共に、「児童生徒の多様性を踏まえた学級づくり」について、「ユニバーサルデザイン化」をめざし、尼崎の児童生徒の姿を通して研究・実証をした報告です。

（総括 土高 伸也）

◇◇◇ 「一人一人と向き合い、心を繋げる」 ◇◇◇

―拙い学級づくり、学校づくりを通して―

失敗は星の数ほどある。それはおいといての話である。

その1 学級づくりの原点

26歳で民間の会社から、浜小学校の教師へ転身した。そして、3年目の6年担任でのスタートまでは、自分の思いどおりに学級づくりができていたように感じていた。ところが、5月に入り、男子のリーダー格(以下、「ボス」と称す)が「先生は、女をひいきしている」と言った日を境に、明らかに男子のほとんどが、信頼の目から冷めた目になっていった。

理由は、バレーボールクラブを希望した補欠の女子がいたのだが、最初のクラブ活動が始まるまでに他クラスの女子が引越したので、担当の先生に頼んで、その子をバレーボールクラブに入れてもらったのがきっかけだった。ボスを中心に3人の取り巻きがいて、影響力が大きく、他の男子も同調するしかなかったと思う。それからは、男子の信頼を取り戻すための試練が始まった。

児童会役員選挙があり、児童会長と副会長に取り巻きの二人が立候補した。通すことが信頼回復の一つと考え、書記候補の女子を含め、三人を何度もクラス全員の前で練習させ、目論見通り、全員当選させることができた。

ボスは、4年生時には自転車で校庭を乗り回したり、朝の会で、隣のクラスに殴りこんで、ぞうきんを投げつけるなど、毎日ケンカをする元気な子だった。しかし、大変男気があり、リーダー性も兼ね備えていて、誰もが一目おくような子だった。そのボスとは、事あるごとに話をしたり、一緒に野球をしたり、関わりを多く持ち、自分の考えや気持ちが通じるように努力した。取り巻き三人衆の一人の子は、すぐにキレて、そうなる手がつけられないところがあった。ケンカをしょっちゅうするので、1年生時から先生に叱られ続けてきたが、本来はナイーブでとても心豊かな子だった。腹を立てても、それを抑制しようとする場面が増えてきた頃、傘立ての上に座っているその子の横に座り、「よくがんばっているなあ。今までならすぐ手が出ていたけど、辛抱できるようになってきたなあ。根はずごく優しいし、先生は大好きや。クラスを学校で一番にしたいから、力を貸してくれへんか」と言うと、ニコッと微笑んでくれた。児童会長になった子は、文章で自分の気持ちを書くのが好きで、毎日4ページくらいのやりとりをし、気持ちを伝え合っていた。一人一人と向き合ううちに、男子全員、自分を信頼するようになってきている様子が見え始めた。

ある時、「阪神の掛布は飲んで帰っても、毎日屋上で素振りをしている。みんなも努力の一貫として、全員徹夜で勉強してみろ」と言うと、翌日、男子の半分以上が朝からあくびをしていた。本当に徹夜しようとしたのだ。

そして、卒業式前に、ボスが、「先生、日曜日に学校に

出てきて」と言うので、教室に行くと『真鍋先生お礼の会』と黒板に書いてあり、男子全員がグループで出し物をしてくれ、最後に、ボスが、「先生、ありがとう」と言って、男子全員で買ってくれた高価なスポーツシューズを手渡してくれた。ボスの顔は、涙でぐちゃぐちゃだった。そして、全員が号泣していた。自分自身も涙が溢れ、「みんな、ありがとう」と言うのが、精一杯だった。自分なりに一人一人と向き合うことで、「みんなと繋がるんだ」ということを心から実感できた。

その2 「これでいいのだ！」

杭瀬小学校に異動して5年目、6年担任の時、一人の不登校傾向の男子がいた。何をすることも自信がなく、発表も蚊の泣くような声だった。体育の時間になると、「先生、どうしよう」といつも言ってきた。「とりあえず体操服に着替えとけよ」と言うと、体操服で、指示する僕のそばに居るのが常となった。そして、見学しながら、「どうしよう」と言うようになり、「入ったら」と言うと、少しずつ参加できるようになり、一番苦手な器械運動の授業にも参加できるようになった。最後の課題は、水泳だった。「とりあえず水着になり」と言うと、7月の間、ずっと水着での見学ができた。その子の精一杯の努力の賜物である。

9月になり、「どうしたら、プールに入れる?」と聞くと、「1時間自由遊びにしてくれたら」と言うので、学年の先生にお願いして、その時間をつくった。プールの中から手をさしのべると、その子は、恐る恐るだが、プールに入った。顔はつけられないが、その子は、クラスや学年のみんなとプールに入れた喜びから、満面の笑みを浮かべていた。

その3 誰もが、「自分のことをわかってほしい」

最後の5年間は、尼崎北小学校に校長で赴任した。当時は、学校崩壊のような状況にあった。だから、保護者等からの苦情は、枚挙にいとまがないほどだった。「皆でほめ、皆で叱る」体制づくりをし、子どもや保護者の心を育てる取組を行った。先生を一人でもつぶしたら辞める覚悟で臨んだ。しかし、毎年、先生がつぶれかけ、綱渡りの日々だった。最後は、先生たちが踏ん張ってくれた。感謝あるのみ。課題はたくさん残ったが、5年目には、子どもも保護者も教職員も、自らあいさつができるよい学校になった。また、問題を抱える子どもたちや問題を抱える保護者たちと、結構分かり合える関係になった。繋がることができたと思う。

皆さんに伝えたいことは、どんな保護者でも、どんな子どもでも「自分のことをわかってほしい、認めてほしい」と思っている。だから、そのことを根底に置きながら、一人一人と接してほしいと願っている。

(元尼崎北小学校長 真鍋 憲司)

教育情報コーナーへどうぞ

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。教育総合センターでの研修や会議の時など、ぜひお気軽にお立ち寄りください。今回は、新刊の中からご紹介します。

(情報コーナー担当・幾田)

- 『アクティブ・ラーニング入門～会話形式でわかる「学び合い」活用術』
西川 純著/ 明治図書
- 『変わる学力、変える学力～21世紀を生き抜く力とは』
高木展郎編/ 三省堂
- 『スクールカーストの正体～キレイゴト抜きのいじめ対応』
堀 裕嗣編/ 小学館
- 『ためられない警察連携が生徒を守る～被害生徒を生まない毅然とした生徒指導』
瀬田川 聡著/ 学事出版
- 『事例解説～教育対象暴力・教育現場でのクレーム対応』
近畿弁護士連合会編/ ぎょうせい
- 『宿題なんかこわくない～発達障害児の学習支援』
塚本章人著/ かもがわ出版社
- 『教師の心が折れるとき～教師のメンタルヘルス』
井上麻紀著/ 大月書店
- 『英詩のこころ(岩波ジュニア新書)』
福田昇八著/ 岩波書店
- 『親と子の愛情戦略(講談社現代新書)』
柏木恵子著/ 講談社
- 『子どもたちが身を乗り出して聞く～道徳の話』
平 光雄著/ 致知出版
- 『中学校「特別の教科」の授業づくり・集中講義』
水登伸子著/ 明治図書
- 『実践から学ぶ・深く考える道徳授業』
加藤宣行編/ 光文書院
- 『学級づくりがうまくいく～全校一斉方式ソーシャルスキル教育・小学校』
伊佐貢一著/ 図書文化
- 『保育者が知っておきたい発達が気になる子の感覚統合』 木村 順著/ 学研教育出版